

平成23年3月28日に松戸市立病院建替計画検討委員会が、「松戸市立病院は現在と同規模程度の病床数（現在の病床は613床）を確保することが必要であり、将来の高齢化とともに激増する医療ニーズに対応するためには、建設予定地にさらなる拡張の可能性が求められる」との結論を出しました。我々医師会は、この考えに深く賛同するものであります。私どもが賛同する理由、特に600床程度の病床が何故必要かについての考えを述べます。

## 「松戸市立病院は、なぜ、600床程度の病床が必要か？」の疑問に答

### えます

#### 1) 松戸市立病院は、千葉大学附属病院に匹敵する高次機能を備えた病院

救命救急センター（最重症者を扱う病院）、地域がん連携拠点病院、小児医療連携拠点病院（小児科の中核病院）の3指定を千葉県から受けている病院は、千葉大学医学部附属病院(835床)と、松戸市立病院（613床）、旭中央病院（956床）のみです。さらに、全県対応型脳卒中連携拠点病院や、災害拠点病院（震災などの場合の拠点病院）、第2種感染症指定病院（新型インフルエンザなどの感染症に対する拠点病院）でもあります。これらの病院機能（医療サービス）を維持満足させるためには、最低600床程度の規模が必要だと考えます。

#### 2) 松戸市立病院は、東葛北部医療圏・松戸市の唯一の高次中核病院

東葛北部医療圏には、130万人が居住しています。この医療圏で、高度な医療を実施しているのは、松戸市立病院しかありません。また、年間、松戸市立病院に、松戸市の2次待機病院（千葉西病院、新東京病院など）から100件を超える重症患者が救急車で搬送されています。まさに、松戸市立病院は、東葛北部・松戸市の最後の砦なのです。

#### 3) 松戸市立病院は、急性期総合医療と小児周産期医療の両機能を備えている

成人の急性期（病気の初期で症状が重症な時期）総合病院としては、一般的に400床から450床が必要といわれています。松戸市立病院は、これに、トップレベルの小児周産期医療のための150床が加わります。そのため、成人と小児合わせて全体で400床程度では、この2つの機能の医療の質を保つことは出来ません。この質を保つためには、多くの様々な分野の専門医が迅速に協力しあう環境が必要であり、これを保障するためには、600床の病床が是非必要です。

#### 4) 松戸市立病院の医師の多くは、病床規模が縮小されれば、退職する

市立病院の医師達は、高度医療を実践して、医療の最後の砦を守りぬくことに、生き甲斐と誇りを持って働いています。病院の規模が縮小され、中核病院の役割が果たせなくなれば、難病患者や重症の交通外傷の患者達を救命すると言った医療の提供が行えなくなり、高度な医療の提供により市民の命を守りたいと願っている専門医の生き甲斐を失い、多くは離職していくでしょう。医師がいなくなれば、松戸市立病院は中核病院としての機能を失い、地域全体の医療に甚大な影響を与えるでしょう。答申でもこの大量退職の恐れを指摘しています。

#### 5) 財政的見地からも600床が必要

中核病院としての診療加算が働き病床が多くなれば、その分、増益になります。一般に、全国の中核病院では、550床以上になると、経営が黒字化するといわれています。

#### 6) 将来、松戸市は、入院患者が急増する

昭和50年頃から、千葉県には、日本でも有数の流入人口がありました。これらの流入した人々が高齢化する中で、千葉県は、今後20年間に、全国でもトップクラスのスピードで、高齢化が進展するといわれています。この東葛北部（松戸市等）は、その中でも最も高齢化率の進展が早く、高齢者の急増に伴って、がん・脳卒中・心筋梗塞・糖尿病・肺炎・整形外科などの病気で急性期病院の入院患者さんが急増します。このような背景から、答申では将来の医療ニーズに対応するためには、建設予定地に更なる拡張の可能性を求めています。

以上から、600床の小児周産期医療も含めた急性期総合病院を早急に作るべきです。